

えられる土壙については、井ノ口遺跡と距離的にも、性格的にも異なることから、新遺跡として新たな遺跡名を冠すべきものであった。そこで、井ノ口遺跡と年代的に関係することを考慮して、小字名をとって「井ノ口中川原遺跡」と呼称することにした。

（2）平安・鎌倉時代の土葬墓をめぐって

墳墓とした理由 第18トレンチの遺物が埋納された土壙を、墳墓と推定したのは次のような理由からである。

「(1) 遺跡の性格」で結論づけたように、本遺跡は集落などの生活址とは認めがたいものであった。したがって、まとまりある遺物が整然と埋められているこの土壙についても、集落に関係する遺構とは別な性格を求めるべきものであった。

遺構の性格を考えるうえで、遺構と遺物の出土状況を検討してみると、いくつかの旧状が復元できる。すでに前節でも述べたように、土壙内の土器が完形品で占められ、また3群よりなる土器の配置、あるいは群中の土器の置き方に、ありありと人為性が認められるのである。このあたりは、明らかに土壙内に埋められた“物”に対して、供献品もしくは副葬品といった特別な意味を示しているものと理解できる。絹布と推定される布に包まれた和鏡も、この時期になると容姿をうつす本来の用途に使用されはじめると、未だ限られた階級の持ち物であることにはかわりない。また、日常用具としての性格をもつ反面、和鏡出現以前の鏡にみられた呪術性をも兼ね備えており、非日常的な祭祀用具としての性格をも色濃く留めている。土壙内のあたりからみて、土器と同様に供献品あるいは副葬品と考えられるが、鏡自身のもつ辟邪、除魔、あるいは鎮めといった点も大きなウエイトを占めていよう。

遺構の構造を明らかにしたのは、鉄釘の位置である。釘は、土壙あるいは地下水の影響によるものか、土壙内の限られた場所にしか残っておらず、しかも保存状態が悪かった。しかし、残された釘の配置に規則性がみられ、さらに釘に木質が付着していたことから、木櫃の存在を考慮に入れて、土壙内に残された遺物の出土状況を考えると、土器の一部や鏡に斜めに傾いた様子がみられるのは、埋納時は木櫃の蓋の上に置かれていたものが、蓋が腐ると同時にずり落ちて動いたと推定されるのである。さて、木櫃の大きさであるが、釘の配置や南東土器群の傾斜方向などから復元すると、東西約50cm、南北約80～85cmほどの長方形となるが、高さについては判らなかつた。

以上のような状況から、木櫃を埋置したこの土壙を墳墓と推定したのである。墳墓と考えて各地の平安時代から鎌倉時代の諸例と比較すると、土壙の規模や形状、あるいは類似した土器の供献（副葬）例がみられる。和鏡の伴出例も数は少ないが認められており、鏡を魔除け、鎮魂と考えることで容易にその意味を理解できる。また、立地についても、現在でこそ水田であるが、発掘調査より推定される旧景観は、石田川の旧河原に近い原野か荒れ地のような場所であろう。このような場所は、直接生産の場と結びつかないため、早くから墓地に利用されており、典型的な立地といえよう。

木櫃を棺とした場合、まず第一に問題となるのはその葬法である。土壙内には、精査したにもかかわらず、火葬骨、灰、炭などは認められなかった。おそらく人骨は消滅してしまっているが、土葬であったと思われる。ただ土葬と考えた場合、土壙の規模から幼児以外伸展葬は不可能であることから、屈葬による寝棺と推定される。¹⁴ 土壙の深さについては、寝棺と考えてもやや浅く、おそらく木櫃が腐って後のある時期に、調査者の報告にあるよう、整地が行われ、土壙の上部が削平されたのであろう。

平安・鎌倉時代の土葬墓 土壙の性格を、木櫃を納めた土葬墓と結論づけたところで、近畿地方各地の平安時代から鎌倉時代の土葬墓について概観してみたい。

平安時代から鎌倉時代の土葬墓は、個々の資料は増加しているが、南北朝時代以降の中世墓地のように、墓域あるいは墓地全体の状況がある程度把握できる例は、まだ多くはない。また、土葬墓自体、長くその実態に不明な点が多かった。しかし、近畿における平安時代前期（9世紀）の資料については、黒崎直氏によって整理がなされ、その歴史的意義がとかれている。¹⁵黒崎氏によれば、8世紀に火葬の盛行期があつて後、8世紀末から9世紀前半に本來的葬法たる土葬への回帰があるという。そしてそれは、火葬の「薄葬」指向に対して副葬品を豊富に伴い、「厚葬」の性格を色濃くもつてゐるという。ところがそれ以降（承和年間以降10世紀を含む時期）、再び薄葬を基調とした、火葬・土葬の混在期がみられると3つの段階を示している。こうした葬法の転換を、必ずしも仏教思想の深い理解によるものではなく、天皇喪葬を範として影響されたものと考えている。¹⁶

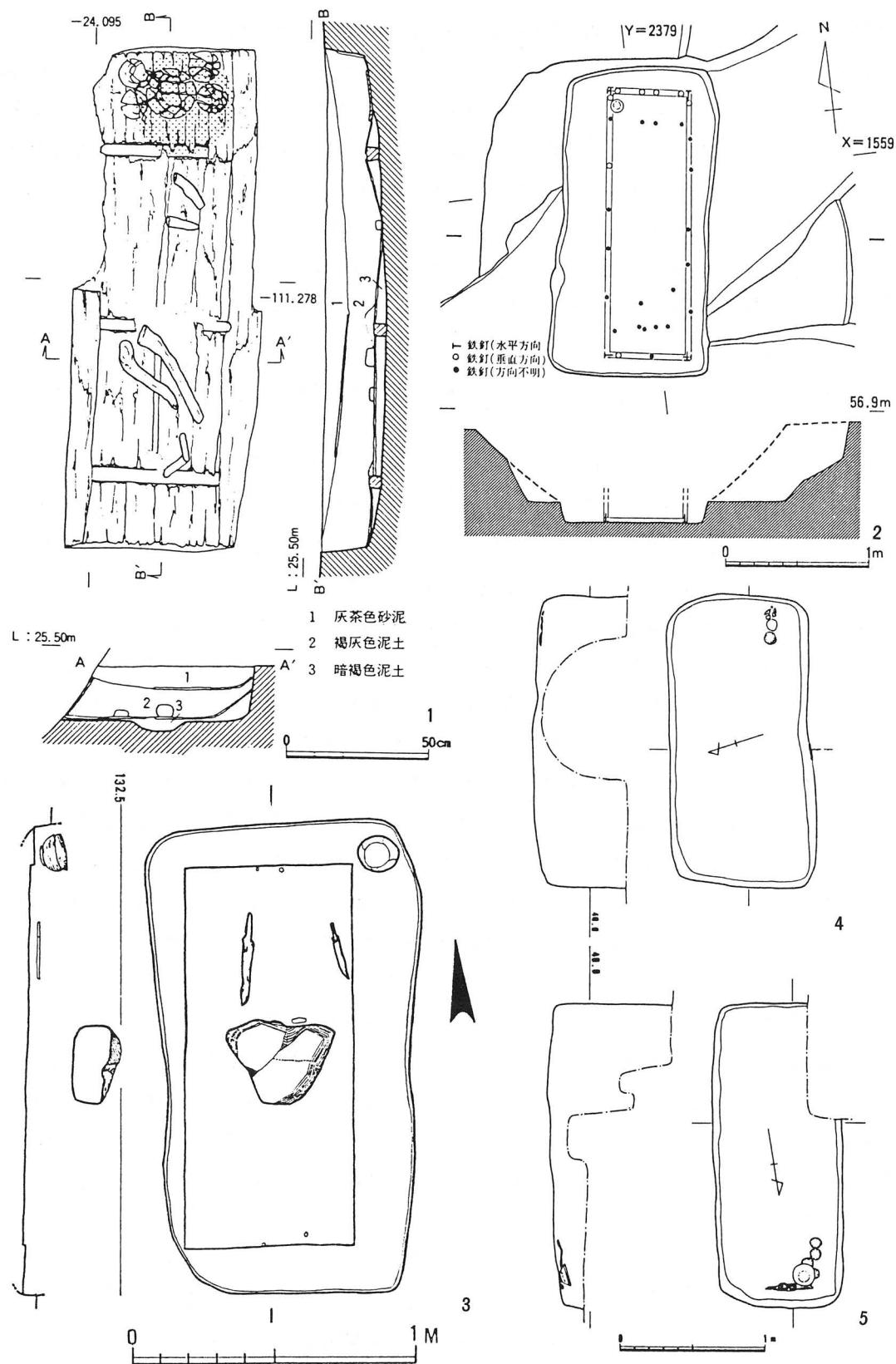
平安時代（10世紀以降）から鎌倉時代の土葬墓については、まだまとまった研究はない。しかし、当時の中心地たる平安京・中世京都の墓の発掘資料が五十川伸矢氏によって整理されており、葬法の形態や墓制など興味深い問題点が提示されている。¹⁷

発掘調査例の中では、木棺の遺存した好資料——例えば奈良県明日香村平吉古墓（9世紀）、平安京右京三条三坊の木棺墓¹⁸（10世紀）、同右京五条二坊SK3¹⁹（12世紀）、大阪府枚方市交北城ノ山遺跡、兵庫県三田市下所遺跡²⁰の木棺墓（12世紀後半から13世紀前半）などがあり、棺の構造、遺物の副葬・供献の状況などを知るうえで重要な点である。これら最近の知見から、近畿地方の土葬墓を整理してみよう。

現在発見されている土葬墓の大きさからみると、伸展葬が全期間にわたって行われていたようである。ところが、土壙の形態をみると、11世紀後半頃を境に変化があらわれる。全体的な傾向として、早い時期（9・10世紀）には、土壙の幅と長さがほぼ1：3の長方形（長方形を基本形とし、隅丸長方形、橢円形をも含む）を呈するのに対し、11世紀後半ごろより奈良県明日香村嶋ノ宮伝承地例や京都市京都大学構内AT27区例を初源として、土壙の幅に対する長さの割合が小さくなっていく。その割合は、1：2を中心に多少変化はあるものの、1：2.5から1：1.7ほどの枠内におさまるようである。²¹この傾向は、平安時代末期の12世紀以降より顕著になる。1：3の古いタイプの土壙も、大阪府高槻市上牧遺跡例や平安京右京五条三坊例のように、11世紀後半から12世紀にかけての時期まで残ることから、この時期2つのタイプの土壙が併存している。ただ、土壙の形態は変化するが、中に埋められた木棺は、京都大学構内AT27区例（釦の位置より木棺を復元）や下所遺跡例のように、棺の幅と長さの割合が1：3とそれ以前のものと大きく変りないものもある。

一方、土壙の形態の変化よりやや遅れて、土葬墓ではあるが成人の伸展葬を考えるには、やや規模の小さすぎるものが出現する。これらは、幅が十分ありながら長さが足りないことから、おそらく屈葬による寝棺と考えられ、12世紀後半から13世紀前半ごろより出現する。井ノ口中川原遺跡例のほか、兵庫県龍野市福田天神遺跡土壙²²（12世紀から13世紀）、長岡京右京SK2806（13世紀）などがあり、福田天神遺跡例では約100cm×80cmほどの木櫃の底部の痕跡が残っている。ちなみに、坐棺と推定される土壙は、現時点ではまだこの時代認められておらず、おそらく鎌倉時代以後になってから登場するのであろう。

次に墓地のあり方をみると、単独あるいは数基よりなる群は認められるが、中世墓地にみられる墓域的なものではない。この点は、南北朝時代以降の中世墓地にみられる土壙墓群と好対象である。12世紀から13世紀にまで時代が下ってもなお数少ない土壙墓は、美しい陶磁器の蔵骨器に納められた火葬墓と同様けつして庶民層の墓ではないのである。むしろ、平安時代前期から続く貴族層の墓の延長線上にとらえた方が理解しやすいであろう。しばしば副葬あるいは供献に用いられる白磁や青磁の碗にしても、近畿地方の12世紀から13世紀の集落遺跡でごく一般に認められるようにはなったが、土器全体に占める割合は少なく、その所有なり用途なりが限られたもの



第7図 平安時代から鎌倉時代の土葬墓

1. 平安京五坊三条
2. 京大構内AT27区
3. 奈良・鳴ノ宮伝承地
- 4.5. 京都・青野南

とみて良いだろう。

滋賀県下における平安時代から鎌倉時代の墓地 滋賀県下の12世紀から13世紀の墳墓は、これまでに火葬骨器を中心のかなりの数が発見されている。^㉙ここで注目されるのは、出土した骨器の多くが、輸入品の青磁、あるいは瀬戸、常滑などの陶器の優品を用いていることである。さらに器形としても、四耳壺、三筋壺、瓶子などに比較的特定しており、雑器的要素の強い器形はあまりみられない。^㉚こうした骨器よりなる代表的な遺跡は、^㉛蒲生郡日野町に所在する日野大谷遺跡である。この古墓は、平安時代末期から南北朝時代（12世紀末から14世紀前半）にかけて造墓されたといわれており、中国陶磁器、瀬戸、常滑、越前、信楽などの四耳壺、瓶子、三筋壺など約60個の骨器が、石組や石敷によって区画されてる。こうした墓地のありさまと内容は、付近の一集落の構成員による歴代の墓と考えるよりも、周辺幾集落かの特定の人々とそれに繋る人々の墓山と考える方が妥当であろう。ただ、各時期における被葬者の性格づけについては、古代末から中世前半にかけての日野の位置と歴史の中より把握すべきものである。

骨器に火葬骨を納め埋葬した墓地の他、12世紀には大津市高峰遺跡の古墓のように、方形のマウンド内に骨灰を納めた木櫃を埋置した墓もある。主体部は1体で、副葬品はなく棺も腐朽し遺存していなかったが、骨灰の汚れた層に混って鉄釘が出土している。また、墓壇内には土師器の小皿が積重ねられており、墓前供養のありさまがうかがえた。

高峰古墓のように方形の墳丘をもつ墓ではないが、高島郡高島町中ノ坊遺跡では、地形の高まりを巧みに利用して、周囲を方形に整えた遺構がある。遺構は、4.5m×5.8mの方形で、高さは20cmを測り、中央よりやや離れて、壁面が赤く焼け底部に炭の残った不整形な土壙がある。土壙内ではないが、土壙周辺より火葬骨片が出土していることから、やはり墳墓の一種と考えるべきであろう。時期的には12世紀から13世紀前半ごろのものと推定され、単独で立地している。

このように火葬墓が盛行する中、東浅井郡浅井町北野遺跡で1基の土葬墓が確認されている。年代は13世紀前半のもので、土壙の壁面がほぼ垂直で長方形を呈し、底面が平坦であることなどから、木棺が使用されていたと推定される。墓は、そう時期差のない掘立柱建物から十数m離れているだけで、土壙の主軸方向も建物と大差なく、屋敷地に近接、あるいは屋敷地内にあったのかもしれない。このようにしてみると、北野遺跡の土壙墓は、先にみた近畿地方の土壙墓のあり方に、多くの類似点が認められる。屋敷地内にある土葬墓については、大阪府高槻市宮田遺跡を例に、その被葬者を貴族や僧侶など上流階級以外の人々の墓と考えたことがある。そして、京城を離れた地にあっては、墓地の管理が寺院や村によって共同で行うだけの社会的基盤が十分にできあがっていない、^㉛共同体としては未熟な時期的一面を示すものではないかと評価したことがある。しかし、それ以後の土葬墓の資料の増加をみると、屋敷地内にある墓についても、時代や地域性によって再考すべき点があらわれている。^㉜

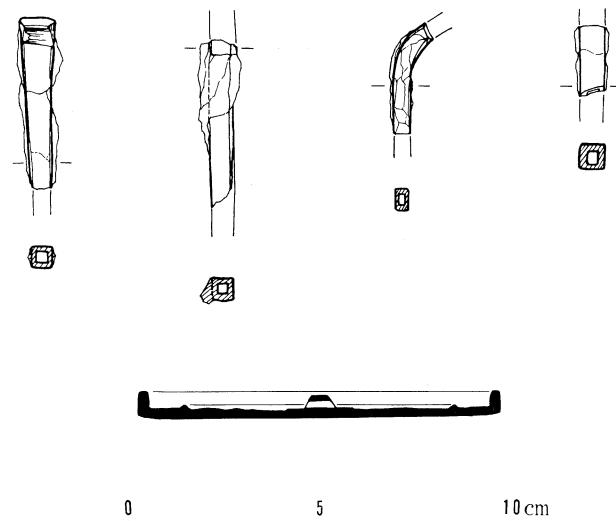
以上、滋賀県下における12世紀から13世紀の墓のあり方について、発掘調査例から素描してみた。その結果、墳墓の分布と数は前代にくらべて増加しており、被葬者の拡大が推定されるが、まだ庶民層の墓とよべるものではないと考えられた。村落を構成する人々の墓地は、石造品や遺跡（中世墓地）の内容からみて、南北朝時代ごろを境によくまとまってゆくようである。

井ノ口中川原古墓総括 さて最後に、井ノ口中川原遺跡の古墓について、まとめを行っておこう。近畿地方の同時代に営まれた墳墓と比較して、木櫃に安置され和鏡を副葬したこの土葬墓の被葬者は、特定こそできないがこの地域にあってはきわめて身分の高い人物であったと推定される。副葬された和鏡——秋草双鳥鏡のデザインは、画面をのびのびと使い、同時期の和鏡の中でも優れた作品であるという。こうしたことから、今一步推測を

深めるなら、被葬者の生前の性格の一端に京文化との結びつき、あるいは教養といったものが反映されているのかもしれない。

考古学的にみた場合、この古墓は単独で存在し、墓地として継続あるいは群集しない点に特色がみられる。また、伴出した遺物も比較的豊富で、その出土状況から興味深い事実が判ってきた。遺物の出土状況を復元すると、遺体を納めた木櫃の蓋の上に、埋葬時、土器と和鏡を置いて埋めたものと考えられる。ただ、土師器の小皿の大半と白磁碗・小皿は裏むけられており、また表むきに置かれた土師器の大皿も重ねられていることから、供物を盛って埋めたものではなく、野辺の送りの際に用いられた土器をまとめて埋納したものと思われる。ほぼ同時期の高峰1号古墓にも、墓壙の中に土師器の小皿が積重ねられており、当時の葬送習俗の一端を知ることができよう。

県下の蔵骨器の出土例が増加するこの時期、この土葬墓が伝統的な葬法を受け継いだものか、あるいは仏教による土葬なのか判断に苦しむところである。前者の場合、葬法もさることながら、鏡の副葬を御魂鎮という意味で重視すれば、平安時代の神事に相通じるものがある。³⁸⁾一方、仏教的にみても土葬の例を指摘することはできる。例えば、『今昔物語集』の「播磨国印南野において野猪を殺した話」にみられる土葬のありさまは、埋葬の後、墓の上に率都婆が立てられている。この状景は、『餓鬼草紙』にみられる土饅頭の封土上に木製の率都婆が立つ墓の姿である。また、絵巻にみられる葬送のありさまには、興味深い習俗がある。それは、『法然上人絵伝』などの葬送の場面に、棺の上に御幣がたてられている様子が描かれている。このことは、当時の葬送儀礼が、主として仏式によりながらも、なお仏教の教理や法式にみられない品物や風習を混じえていることを物語っている。³⁹⁾井ノ口中川原古墓の和鏡も、そのようにみれば様々な要素の集合した葬送儀礼の一面として理解することもできるのである。葬法の宗教面についての断定はさけたいが、各々の可能性について提示しておく。



第8図 土壙内出土の鉄釘と和鏡断面実測図